<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>古代ロシア語の関係詞 ИЖЕ と КОТОРЫИ について 16世紀の文献を中心とした関係詞の変遷</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>藤代 節</td>
</tr>
<tr>
<td>発行誌</td>
<td>言語学研究</td>
</tr>
<tr>
<td>発行部门</td>
<td>商務部</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年月</td>
<td>1988-12-01</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2433/87934">http://hdl.handle.net/2433/87934</a></td>
</tr>
<tr>
<td>形式</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>正文出版社</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>Kyoto University</td>
</tr>
</tbody>
</table>
0. はじめに

古代ロシア語において関係詞として多用されるものに、ИЖЕとКOTORЫМがある。この2つは、ロシア語史の主として、文献の性格によって分布を異にしながらも、共に関係本金節を導く機能を担ってきた。ところが現代ロシア語においては、この二者のうちКOTORЫМ(КOTORЫМ)のみが関係代名詞として機能している。

本稿においては、ИЖЕからКOTORЫM、もしくは、ИЖЕ、КOTORЫMからКOTORЫMという変遷について両者にとって最も意義深い時期であったと考えられる16世紀において、両者がどのように使用されていたかを明らかにし記述することを第一の目標とした。それに基づき、古代ロシア語の関係詞ИЖЕとКOTORЫМの現代ロシア語に至る変遷上、看過することのできない点について考察を行いたい。従来の研究では、長い時間帯を一時に扱ったもの（Сумкина:1954）や、両者のうち一方のみを専ら扱ったもの（Качевская:1954）が多かったので、本稿はそれらを補うものとなろう。

1. 関係詞としてのИЖЕとКOTORЫM

ロシア語における関係詞は、次の2つのタイプに大別できる。

1) 従属複雑文において、主節中の所与の（代）名詞（句）を修飾する従属節を導く（すなわち、その従属節と主節を結び付ける接続詞としての役割と、従属節中において代名詞あるいは副詞の役割を果たす）単語としての関係詞。

例1. 3)

Мнится не согрывая у богу, и есть поганого горье, и обьшник

есть нечестивым, o

них же пророкъ Исаия рече:

'不信心な者共' prp.*P. ИЖЕ

m.pl.D. 「信じて」 m.pl.P.

/Дом., гл.18/

「彼は、神に対して恥ずべきことがないと考えているが、彼は異教徒よりも悪しく、予言者イサヤが（その人々について）語った不信心な者とともに共犯だ。」
例2. И тебе было пенья на своих людей, которые неправду

прп.+A. 'Свое' M.pl.n.  
'До' M.pl.A m.pl.A.

посылают, а наши послы от тебя напрасно мучились от твоего

'Телозу'  
prs.pl.3

неразсуждения.  /Пос. Иог. III./

'Омее, вонги телозу омее снова тебя чсать должен был всё же.  
Вся воначальная и отклонения на нем и омее не было.

1) Семей древесный, в котором ве Состоят речь сущей (де) сторон, 
в которые подчиняют имена именами имен обязательных в семействе

例3. Не мни, человеке, яко ложь видишь сей по истину ти глаголю:

востания скоро и повься, яже ти прежде возвести. /К.I., гл.71/

ИЖЕ  
aor.sg.1

'Он же, этот человек, это я тебя оставь, возвести, яже ти прежде возвести сообщил.'

古代ロシア語においては、次のものが関係詞としての役割を果たす41:

Которым, Кон, Иже, Кто, Что, Где, Куда, Откуда, Иде, Когда, Яко, 
Елико 等。これらの関係詞のうち、ИжеとКоторымは、使用の頻度が高く、古代ロシア語の文献でみられる限り、統語上の機能及び形態上の振舞いにおいて競合関係にあると判断できる関係詞である。この二つは、当然のことながら、古代ロシア語11世紀から17世紀の長い時間を通して常に拮抗状態にあったとは考えられない。又、ある時期に共通にИжеがКоторымに交替したとも考えられない。これら二つは、その分布を異にしながら、又、各々が、変容を経ながら、一方は消失し、一方は現代ロシア語の関係詞の体系の中で大きな一画をなすに至るのである。

ИжеとКоторымは、先行詞に性・数において一致し、従属節中での要求に応

して格を変える。これら二つの来源と考えられるところは全く異なっている。

従来の見解のほぼ一致するところでは、Ижеは指示代名詞のИに強意の助辞И
が組合わされたものだとされている (Буслаев:1959, Ломтев:1956等)。指示
代名詞に来場を持つため、Ижеは本来的に前方照応となる。 つまり指示を受
ける名詞を含む文 (従属複雑文では主節にあたる文)が先行し、その被指示詞
を受けてИжеが後置され、その主節を補う文（同上、従属節）が続く。 そし
てその二文は、パラタクシス、もしくは重文の形式（すなわち、二つの文が
並置の接続詞И「そして」やИНО「すると」等でつながれる形式）をとって生

-202-
起する。このパラタクシスによる、もしくは、並置の接続詞により結ばれた文の中のИжеがやがて関係従属節を導く関係詞としてのИжеとなったと考えられている。

一方、関係詞КОТОРЫИの来歴するところについては、一致した見解は得られていない。例えば、Сумкина(1954)は、КОТОРЫИは、元来、疑問詞であり、КОТОРЫИによって形成される関係従属文は、疑問文と答えの文が結合したものを考えられるという一方で、疑問詞の持つ不定形の意味が具体化したとも考えられている。又、Ickler(1981)は不定代名詞的な意味から関係詞の用法が派生してきたとしている。

両者が、関係詞として使用され出した時期については、文献上の制限もあり、明確にはしえないが、これら来歴の異なる関係詞がロシア語史上で一時期は共存し、やがて、КОТОРЫИのみへと、その関係詞としての機能を移行させた。

次の例は、古代ロシア語による最古の文献「オストロミールの福音書」と、現代ロシア語による福音書の対応する箇所である。

例4. Въскрысь ИС. за оутра въ пьрые сёмбы. Мависа прьжле Марии.
МАГДАЛИНИ. ИЗ ИЖЕ НЯГМА СЕМЬ БСЬ. /Ост. Мар., 16-9/

例5. Воскреснув рано вь первый лень недели. Иисус явился соперна.
Марии Магдалины, из которой изнал семь бесов. /Биб./

「週のはじめの日の朝早く、イエスは、かつて七つの悪魔を（その女から）追い出してやったマグダラのマリヤにまず姿をあらわされた。」

ここでみる限りでは、二つの関係詞の統語的環境は同じであり、ИжеからКОТОРЫИへと関係詞が置き換わったようにみてとれるが、事情はそれほど単純ではない。確かに古代ロシア語において、Ижеは、16～17世紀までの残存している文献、特に文学作品や年代記、宗教的文献において非常によく使われており、一方のКОТОРЫИは、それと比較して文献にみる限りでは、生起の頻度は低い。とはいえ、古代ロシア語における早い時期においてさえ、КОТОРЫИ関係詞としてのКОТОРЫИの使用がみられるのである。こういった点が古代ロシア語の主要な関係詞ИжеとКОТОРЫИの関係を複雑にしている。

次章より、16世紀の文献について両者の分布を調べ、その関わりを検討していきたい。
2. 調査の対象とした文献について
2.1. 文献を選ぶにあたって

ИЖЕとКОТОРЫНの分布について、従来、次の二点が指摘されている。
1) 文献の性格について
   ① 宗教的色彩の濃い文献（例えば、聖書外典、聖者伝、高雅な文体を志向
      して書かれた英雄伝など）においては、専らИЖЕが使われること。
   ② 世俗的色彩の濃い文献（例えば、法典文、訴状、私信等）においては、
      専らКОТОРЫНが使われること。

11) 文献の年代について
   ① 15〜16世紀辺りからКОТОРЫНがИЖЕの分布域を侵して多用されるようにな
      ってきたこと。

以上のような点は、筆者が概観した諸文献に対してでも傾向としては正しいと思
われる。しかしながら、これだけの指摘では両者の関係が余りにも不明瞭
である。多用されていたИЖЕがКОТОРЫНにその分布を譲る過程においてどの様
な状況にあったのか。両者の間に機能の分担ということは起こらなかったの
か。こういった疑問に対して、1)、11)は、多くを示しているとは言い難い。
そこで、これらの疑問を明らかにするために、1)、11)に基づいてИЖЕとКО-
ТОРЫНについて更に詳しい調査をすれば、 各々についてその機能をより明確
にすることができる。調査の対象としては、多様な性格の文献を求め得、二
つの関係詞が競合状態にあったと考えられる16世紀ごろの文献が最も適して
いると考えられる。又、16世紀は、統一文章語が成立を見る17世紀の前夜として、
大きく分けて二つの文章語の並存状態にあったといえる。即ち、民衆口語語
に基を置く文章語と教会文章語に基をおく文章語の二つである。上の1)にある
ように、文献の性格が二つの関係詞の生起にある程度、関与するのであれば、
このように動的な言語状況にある時代の文献は興味深い。調査文献としては、
なるべく、ジャンルの異なるものを選んだ。

2.2. 調査対象とした文献

調査の対象として、次の六点を選んだ。選択にあたって、ジャンル、文体、
作者・作品に対する評価などについては、 Винокур(1945), Ларин(1975),
Лихачев(1980), Филин(1981)を主に参考にした。文献名の後の ［ ］ は、例文
出典の際の略号とする。各文献の分量については、付表Bを参照。

① Максим·Грецの著作より

1) 幸福についての手紙 [М.Г., Пос. о Фор.]
11) サポナロールの話 [М.Г., Пов. о Сав.]
マキシム・グレクマクシム・グレク(俗名 ミハイル＝マクシム・トリボリス)は、1470年
ごろアルバニアで生まれ、1550年代にロシアで客死。1492年頃からイタリア
に住み、アフリカで得度した修道僧。1518年、大公ワシーリー三世の招きに
応じてモスクワへ来て、著作、翻訳に従事した。トベリにて死す。文体は、
文学的、文語的で、口語的要素はみられない。1) は、宛名は不明。16世紀
ロシアで人気を博していた占星術、運命論をテーマとして手紙で、後の不
一覧案「禁欲主義者」の運動につながる活動を行っていた著者の目からみ
た、これら流行への批判的な意見が書かれている。ii) は、著者がイタリア
滞在中、最も影響をうけたサボナローラについての話である。その活動と悲
業の死の詳細な記述がなされている。僧侶の生活への言及が多いので、宗教
的色彩の濃い作品となっている。調査に使ったテキストは、《Памятники Лите-
ратуры Древней Руси [以下、ПЛДРと略す] (1984)収録のもの。

(2) カザン史 カザンスカヤ История [К.И.]
金帳汗国成立から1552年のイワン雷帝によるカザン汗国征服までを描いた
歴史小説。軍記物である。作者は未詳。成立は、1564年－1566年とされてい
る(Лихачев (рел。))。作中で作者が自分について、「二十年間カザンにあっ
て皇帝に仕えた。」としているが、実際、どういう背景で成立したのかはよ
くわからない。Тарин (1975：p.252)によると、文体は、レトリックを駆使し
て高雅な文体を志向しているが随所に俗話の要素がみられるという。16世紀
に特徴的である文学作品のジャンルの多様化に応じるため、調査文献とした。
使用したテキストは、ПЛДР(1985)に収録のもの。他に《Полное собрание русс-
ских летописей (ПСРЛ) т.19より、I. История о Казанском Царстве をも
参照した。

(3) イワン雷帝からクルブスキー公への手紙 [Пос. Кур.]
イワン雷帝 Иван Грозный (1530～1584年)とアンドレイ・クルブスキー公
Андрей Курбский (1583年没)との間にかかわられた往復書簡の一つである。
1564年にイワン雷帝からクルブスキー公に宛てた返書であり、 Первое Пос-
лание Ивана Грозного Курбскому「イワン雷帝からクルブスキーへの第一の
手紙」として、写本によって広く普及している著作である。元選抜者会議の
成員であったクルブスキー公が、リボニア側についたことを非難した手紙で
ある。この文献は、私信の性質は持たず、帝が、逆臣に対して怒りを表して、
国家の威信を示すための文書として書かれている。 使用したテキストは、
Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским, 1979 より、 Первое
Послание Ивана Грозного Курбскому(いわゆる1-яプロストラントネレラクセ)。
尚、ПЛДР(1986)の中で…で示されている聖書からの引用部分については、

－205－
調査の対象とはしなかった。

④イワン雷帝の手紙

1) 英国女王エリザベス1世への手紙(1570年) [Pos. Елиз.]
2) スウェーデン王ヨハン3世への手紙(1573年) [Pos. Ног. III]
3) キリル・ペロゼルスキー修道院への手紙(1573年) [Pos. Кир.-Бел.]
4) シメオン・ペクプラトービッチへの手紙(1575年) [Pos. С. Бек.]
5) ボルヴェンスキーへの手紙(1577年) [Pos. Пол.]
6) ヤン・ホドケービッチへの手紙(1577年) [Pos. Я. Ход.]
7) ポーランド王ステファン・パトリーへの手紙(1581年) [Pos. С.

イワン雷帝がその治世の間に外交文書としてのした手紙が残っている。相
手によって(誰に宛てられた手紙であるかによって) ИЖЕとКОТОРЫНの分布が
違っていた。文献の列挙の順は、使用したテキストПослание Ивана Гроз-
ного(1951)に収録されている順にしたかったが、但しそ今日の調査に関して分
量的に有意でないと考えられるものは、対象から除外した。聖書からの引用
部分は、文献③の扱い同じ。

尚、文献③と④は、同じくイワン雷帝の手紙であるが、③の占める量的な、
又、文学作品としての評価の優位であることを考慮して、別々の文献とした。
この書簡集を選んだのは、同一の人物におけるИЖЕ、КОТОРЫНの使用状況を確
認したかったからである。

⑤家庭訓 ドモストロイ [Дом.]

「家庭訓」は、15世紀から16世紀末ヨーロッパにおいて著しく行わわれていた
慣習、道徳概念の集大成とも言うべき編纂本である。編者は、ノブゴロド
出身の高僧シリベストルСильвестр (16世紀初-1568年)。内容は、国家の長
をファーリ (帝) とする家庭の長は一家の男主人とする家父長制を肯定
する教えに則したものである。全64章からなり、信仰についての教えの章（
前半25章まで）と、家計等、日常生活のことについての章（後半6章から63
章まで）と、おそらく、編者シリベストルが著したと思われる子への教え
の章（64章）の3つの部分からなる。今回の調査においては、25章までに64
章を、宗教的文献、又、26章から63章までは、卑近な内容を持つので世俗的
な文献と見なした。テキストは、ПДДР(1985)収録のもの(ГПБ. Q. X VIII, 149,
л.1-л.124:いわゆるコンシン本)を使用した。編者シリベストルは、文献③
の書簡の宛てられたクルプスキー公と同じく、イワン雷帝の側近であったが、
後に失寵にあった。成立は定かではないが、16世紀中葉には成立していたと
されている。
⑥1550年の法典 "Судебник 1550 года [Суд.]
「1550年の法典」は、イワン雷帝の時代に発布された100条から成る法典。
編纂者は、選抜者会議により、各地に発布された。膨大な量の写しが残ってい
るが、写本間に相違は余り見られない（Судебники X V -X VI веков: p.114）。
今回の調査では、いわゆる事務文書で、 деловой стильの代表として選んだ。古
代ロシアにおいては、法典は簡潔な文章で分かりやすく書かれていた。テキ
ストは、Судебники X V -X VI веков(1952)に収録のもの。（16世紀60年代初
めの写本による。）

3. 調査結果
前章で選んだ文献について、まずИЖЕ и КОТОРЫНを、その用法に関わらず抽出した。

3.1. ИЖЕ и КОТОРЫНの分布
ИЖЕ и КОТОРЫНの用法には、1章にあげた関係詞としての用法とは異なるもの
のもみられる。しかしながら、表1にならわれているように、文献によって、
ИЖЕとКОТОРЫНが用法に関わらず、使い分けられているのがみてとれる。それ
ら諸用法には、関係詞と関連する点が少なからずみうけられることから、こ
こでは、関係詞としての用法及びその変則的な用法に加えて、ИЖЕ и КОТОРЫN
の形式をとるものを原則としてすべて調査対象とした。12)

表1. ИЖЕ и КОТОРЫНの分布

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>I</th>
<th>II</th>
<th>III</th>
<th>IV</th>
<th>V</th>
<th>VI</th>
<th>VII</th>
<th>前</th>
<th>後</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ИЖЕ</td>
<td>110</td>
<td>187</td>
<td>166</td>
<td>62</td>
<td>-</td>
<td>25</td>
<td>32</td>
<td>4</td>
<td>20</td>
<td>545</td>
</tr>
<tr>
<td>КОТОРЫН</td>
<td>-</td>
<td>7</td>
<td>689</td>
<td>20</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>46</td>
<td>52</td>
<td>844</td>
<td>162</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3.2. 関係詞ИЖЕ и КОТОРЫН
関係詞としてのИЖЕ и КОТОРЫNは、文献によりほぼ分布を異にし、一つの文
献において両者が等しく拮抗状態にあるものはない。ИЖЕ и КОТОРЫNについて
ここで注意を引くのは、ИЖЕが専ら使用されている文献において、少数では
あるがКОТОРЫNが見られるという点である。このことは、文献の文体、二種
の文章語の併用状況との関わりにおけるИЖЕ и КОТОРЫNの関係について情報を
与えてくれる。この点については、4章においてデータに基づいた考察を行
いたい。
3.3. 変則的なИЖЕとКОТОРЫМ

文献を詳細に調べて行くと、ИЖЕ及びКОТОРЫМの各々について関係詞とは、
語義・語法上、異なるものや、関係詞の変則的な用法と思われるものが観察
された。本節では、そのような、ИЖЕ及びКОТОРЫМについて報告する。（後掲
の表2、表3参照。）

3.3.1 変則的なИЖЕの諸用法

1) 接続詞として機能するИЖЕ

ИЖЕには、文脈によって様々な意味に解釈し得る接続詞として使われている
ものがある。その形式としては、関係詞の主格・対格にあたる形式が専ら使
われる。ежеが最も多く、ついで、ижеが、比較的多数であった。ここには、
比較的多くみられたもののみをあげる。13)

例6. удержи язык свои от зла и устне свои, еже не глаголати

「もじもじする」 「言う」

例7. Сынь или дочь, не послушны отцу или матери, в пагубу

имь бьуть, и не поживуть дней своих, иже прогнывать отца и

「もしも-すれば」 「立腹させる」

досажают матери. /Дом., гл. 64/

「怒らせる」

pres.pl.3

例8. 父や母に従順でない息子や娘は、もしも父を怒らせたり、母を立腹させ

たりすれば身を滅ぼし、生命を全うできない。」

11) 名辞化のИЖЕ

ИЖЕには、不定詞に付加したり、節を導いたりして、文中において名詞の
働きをする句や節を形成する用法がある。各々の例はすぐ後に示すが、この
用法について興味深いのは、次の二点である。

1)不定詞を従えるИЖЕは余剰的であるという点。

2)名辞化するИЖЕは、接続詞 что、即ち、КОТОРЫМの優勢である文章語に

において名詞節を導く接続詞として多用されるчтоに相当するという点。

いずれも、16世紀以降、統一文章語の成立を経て現代ロシア語へ続くロシ
ア語史上、やがて消滅していくИЖЕが、この時代において既に周辺的となっ

—208—
ていることを示している。各々の例をあげる。

例8. 不定詞に付加する例15)

Мнь же еже жити — Христос есть, и еже умерти —

「こと」「生きる」

inf.

приобретение. /М.Г., Пов. о Сав./

「私にとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは獲得である。」

例9. 名詞節を導くИЖЕ

Ино се ли сопротивно разуму, еже не восхотехом в совершенем

「これ」

возрасте младенцем быти? /Пос. Кур., л. 316 об./

「すると、成年に渇ってから、幼児でありたくないと思うのは、別々に反

しているであろうか。」16)

例9は、先にあげた2)との関連で特に注意を絞く例である。この例は、名辞
化のИЖЕを用いて、се—ежее…、即ち、се「これ」= еже以下の節という構文
を形成しているとともに。ここに注目すべきは次の点である。即ち、当
時のИЖЕが多用されない方の文章語においては名詞節を導くのは、ЧТОであり
(例10参照)、CEが専ら、教会スラヴ語に基をおいた文章語において使われ
ていることを考えるとCE—ЕЖЕ…は、民衆口俗語調の文章語において同じ機
能を担うТО—ЧТО…(例10)の構文に対応する表現であるという点である。

例10. И то знатно, что твой панове рала всю землю наволят на

「こと」

кроворазливне хрестьянское, желающи крови разливати хрестьянские.

/Пос. С. Бат./

「おまえの近臣達は、キリスト教徒の血を流そうとして、おまえの領地に

キリスト教徒の流血を起こそうと企んでいるということは、わかって

いる。」

CE—ЕЖЕ…の構文は、文献2)のルブスキーへの手紙において多用されており、
書き手であるイワン雷帝独自の文体であったとも考えられる。即ち、イワン
雷帝が、一方の文章語（民衆口俗語に基礎をおいたとされる文章語）から、
高雅さを強調するために用いた文章語（教会スラヴ語に基礎を置いたとされ
る文章語）に借用したのではないかとも考えられる。このことは、1)の接続
詞的用法と併せて考えると、ИЖЕが、後者の文章語に置いて前者の文章語に
対応する機能を多く担われていることを表している。そのため、ИЖЕの用
法は曖昧さが増す傾向にあったと言えるであろう。

—209—
iii) 「枠構造」のイェ

まず、例を参照されたい。

例1 1. 且彼を彼が逆らうと、彼は怒りを抑えることができ、かの人が生活の資として残した貧しい葡萄園を卑怯な手で奪うことを欲した。」

この用法は、ロシア語における関係主属文の一般的な語順としての「先行詞イェ...関係節...」という語順を、「イェ...修飾部（関係節）...被修飾語（先行詞）」という語順に変えたものとなっている。この用法については、他の用法と関連させて次章で考察を加えたい。

iv）連辞省略のイェ

この用法のイェは、実質的な意味を持たないよう思われるイェである。次例参照。

例1 2. 且彼を彼が逆らうと、彼は怒りを抑えることができ、「学び」の手紙に、「異なった見知らぬ教えに心惹かれは行けない。」（と書いた。）

この用法は、関係詞のタイプ1)において、関係節中の述語動詞である連辞が省略されたものと考えられる。しかしながら、「被修飾語＋修飾部（前置詞句）」という結合が古代ロシア語において一般的であることを考えると、この用法のイェは、名辞化用法のイェの同様（例8参照）に、余剰的なイェだといえる。この用法には、次のように「被修飾語（先行詞）、イェ...形容詞相当語（句）」の場合もある。

例1 3. 且彼を彼が逆らうと、彼は怒りを抑えることができ、「学び」の手紙に、「異なった見知らぬ教えに心惹かれは行けない。」（と書いた。）

iv）の用法と関連して、次のような用法がある。

v） iv）の更に変則的な用法のイェ
まず例を参照されたい。

例 14. :младенца же намего, еже от бога данного

(幼児) 'を(強意の助辞) '我々の prp.*G '神 '与えるた m.sg.A. m.sg.A. m.sg.G PPP. m.sg.A.

pam, хотела подобно Ироду погубить, воцарив князя Володимера.

prgn.
1.pl.D.

/Пос. Кур., л.317-л.317 об./

「神から下された我々の年端の行かぬ子を、ポロジー・ム公を擁立しヘロデ王のように、亡きものにしようと彼らは欲した。」

例 14 は、iV）の連辞省略の用法とその生起の環境が似ているが、先行詞の格に、ИКЕ（ここではеже）以下の主格補語にあたる形式が一致しているのが特徴的である。これを図示すると、本来なら

<p>| | | |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>- - -</th>
<th>- - -</th>
<th>- - -</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>先行詞</td>
<td>ИКЕ—</td>
<td>連辞—</td>
</tr>
<tr>
<td>[格形式 1]</td>
<td>[主格形]</td>
<td>[省略]</td>
</tr>
</tbody>
</table>

となっている。18）この用法は、関係詞ИКЕが余剰的になる場合があることをやはり示している。次章で更に考察を加える。

3.3.2. 変則的なКОТОРЫЙ

1）不定代名詞のКОТОРЫЙ19）

ИКЕに比べてКОТОРЫЙの方は、変則的な（周辺的な）用法を多く持たない。しかしながら、関係代名詞のКОТОРЫЙと密接なつながりがあると考えられる不定代名詞としての用法がある。

例 15. А которые жалобыны заданы судьям и оба истца по суда

КОТОРЫЙ [訴訟]
f.pl.N f.pl.N.

помирились, и по тем жалобыны судьям пошли не имати ж.

[f.п. D. f.п. D.]

/Cуд., ст.31/

「裁判に付された訴訟で、双方が裁判までに和解したら、これらの訴訟については民事官は、料を徴収してはならない。」
Который

 показал, ослабил им быть у нас безопасно, и от нас их имати не

 велел. /Пос. С. Бек./

「当方に居りたいと思う者達には、公よ、慈悲をかけ、失竊させることなく彼らを当方に滞在させ、（彼らを）こちらから運行するのはやめてもらいたい。」

この用法は、従属複雑文である関係詞を含む文とは次の点で統語法上、大きく異なる。即ち,

①不定代名詞を含んで形成される文とそれに続く文が並置の接続詞（例15、16においては、и「そして」）でつながれている点。

②不定代名詞によって形成される文において同定される人や事物が、後置される文中で（代）名詞で置き換えられている（例16においては、которые


показат к нам 「当方に居りたいと思う者達」を、им, их「彼ら」（pl.D.,


pl. A.）で置き換えている。）点。28）

これらの点はあるものの、不定代名詞Которыйを含んで先行する文は、後置する文と結合して、一つのまとまった意味、即ち、条件・帰結の意味を表すので、この用法は、通常の、並置接続詞によって導かれる文の結び付きよりも、従属接続詞によって形成される従属複雑文の結び付きに近い。この用法については、次章で、関係代名詞としてのКоторыйと関連させて更に検討したい。

ii）疑問詞としてのКоторый

これには、特にこの時代に特徴的と思われる用法はなかった。二例をあげるととどめる。

例17. А опричь Москвы и Великого Новагорода и Пскова инде ингле


ни в которых городах отпускных не лавати. /Суд., ст. 77/

Который 'очх' м.pl.R. m.pl.R.

「モスクワ、大ノヴゴロド、プスコフを除くほかのどの町においても、自由身分証を与えてはならない。」
例18．「実際、平等であれば、同胞意識が湧く。が、平等でなければ、どんな同胞意識があろうか。つまりは、そんなことでは僧侶の生活はない。」

4．考察

前章で、16世紀の文献をいくつか調べた結果、得られたイェとKOTORYへの用法を報告してきた。本章では、これらに基づき、関係詞イェとKOTORYの分布について検討し、文体（文献の性格による文章語の種類）との関わりにおけるイェとKOTORYの関係を探り（§4.1.），次に、§3.3.に基づき、イェとKOTO-RYの各々の変容について検討し、それらが関係詞の変遷に及ぼす影響を探る（§4.2.）。

4.1．関係詞イェとKOTORYの分布

イェとKOTORYは、古代ロシア語において、関係詞としての用法で多用される。これらの関係詞がどの様に分布しているか、又、その環境を決定するものがあるのか否かについて、文献①～⑥から得たデータを基に考察する。

表1にみられるところ、イェとKOTORYの分布は、文献によって異なり、一つの文献において両者が等しく拮抗している文献はない。しかしながら、若干数ではあるが、イェの環境にKOTORYが生起している場合がある。それらを詳しくみていくことにより、二つの関係詞のうちやがてKOTORYが優勢になっていく発展を見明らかにするのではないかだろうか。

関係詞イェとKOTORYの混用が見られるのは、文献②、③、④iii）、④v）、⑤の4点においてである。以前の、混用のきわめて少ない文献群を考えると、イェとKOTORYの同一文献上の混用が、16世紀の古代ロシアの二つの文章語の混成による統一文章語成立の萌芽を反映する一事象と考えられよう。次の例を見られたい。

例19．「為す」[pf.p.]

「国と治める」[aor.pl.3]

「あらの」[m.pl.1.A. m.pl.1.A.]

「すべての人」

-213-
которые отцу нашему и матери нашей были главные измениники, исколаров
м.пл.Н.
понимания их выпускали и к себе их примирили. /Пос. Кур., л.313/
'качестве, ванисхе, острый и нежный, как честь волна, на тему, и как оставшийся
вот тебе, а любовь, что в молчании, Господь, и в ней осталась.'; 'мои, на которые
все человечество, и разжж, но никому... 
'отношение к плоду, а невольня
всей привычке, а привычка, что в ней
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
вот тебе, и ведь... а я, и мне, что
たと考えられるとすれば、関係詞ИЖЕとКОТОРЫЙは、二つの文章語が、所与の文献においてどのような混在状態にあるかに応じて、その生起が左右されると考えてもいいだろう。

4.2. ИЖЕ及びКОТОРЫЙの変容

本稿で報告したデータは、関係詞の、ИЖЕからКОТОРЫЙへという変遷において、ИЖЕとКОТОРЫЙの各々についても、それら各々の変容をたどるための情報を提供してくれる。16世紀の共時的様相から見いだせる、ИЖЕについては消失の、そしてКОТОРЫЙについては現代ロシア語に至るまでの、各々の変容の方向は、ИЖЕからКОТОРЫЙという関係詞の変遷におおいに関与すると思われる。

4.2.1. ИЖЕの変容

関係詞ИЖЕについては、その変容を伺わせる点として、まず、先行詞との性・数における一致を欠く例がみられるという点である。この点については、既に指摘されている。例えば、Керешене(1979)によれば、先行詞と性・数において一致しない関係詞ИЖЕは、14世紀までの文献に比較して、15〜17世紀の文献においては急増しており、どの形式の代わりにどの形式を使うか（例えば、ЯЖЕの代わりにИЖЕを使う、等といった規則性）は、同一の書き手においてさえ一定ではないという。今回の調査においてもこの指摘は裏付けられた。どの形式の代わりにどの形式を使うというきまりはないと考えられるものの、ЕВЖЕや、IMЖЕ等、斜格形が、本来所与の先行詞と一致する形式の代替形として使われることは、これらのデータにおいて見られる限りでは見あたりない。ИЖЕの主格形を構成する、Я(ИЖЕ=Я+Же）、Я(ЯЖЕ=Я+Же）、E(ЕЖЕ=E+ЖЕ)は、当時の指示代名詞のパラダイムからすでに外れてしまっている（各々、онь、она、оноにかわっている）が、ИЖЕの斜格形は、指示代名詞の斜格形と同じ形式によって構成されている。そのため、斜格形は、書き手に格を意識させ、先行詞と性や数における一致を欠くИЖЕの代替形にはならなかったものと考えられる。逆にいえば、ИЖЕ、ЯЖЕ、ЕЖЕが、徐々に性・数の区別を書き手に厳密に意識させなくなっても、これらが関係詞としての役割を逸脱しつつあることを示している。Керешене(1979)は、この点について、ИЖЕは、15〜17世紀の書き手達によって、限定部分と被限定部分を結び付ける補助的な不変化詞として考えられていたが、既に、接続詞的語句КОТОРЫЙと同じものとは見なされていなかったと考えている(p.100)。

今回の調査からみると、ИЖЕはКОТОРЫЙとは生起する文体上の環境は異なるとはいえ、関係詞という機能については等しい単語として、未だ十二分に使用されはいたが、徐々に補助的な用法でも使われ出していることがみてと
それは、イヘという単語の変容を示唆している。イヘはやがて使用されなくなるが、イヘの変容は、この消失をある程度説明するものと期待できる。例を挙げて、イヘの消失を促したと考えられる事象について具体的に考察する。

例20. 彼は、非難し、下を向き、詫びて、服を着て、事実を認めた。

イヘ

「このように」「奉仕活動」

m.sg.N. m.sg.N. m.sg.N.

「そして、彼は、彼らの取り決めを望みを愛でて神のためのこういった奉仕活動を衷心から行った。」

この例は、「枠構造」を形成するイヘである。この場合においては、前置詞句「そのために」、イヘ「奉仕活動」を修飾し、「そのためにこういった奉仕活動」というまとまった句であることを示すためにイヘの存在が望ましかったのであろう。ところが、例13のように連辞省略のタイプの関係節で、関係節内に主格補語として形容詞相当語句がある場合は、イヘの生起の必然性が低くなる。例14にいっては、主格補語にあたる形容詞相当語句が、先行詞にその格を一致させるので、イヘの生起の必然性は尚一層低くなっていると思われる。

これら諸用例は、いずれも16世紀の文献にみられるものであるが、イヘの担う機能が小さくなっているという点からイヘ消失の方向を伺わせる。修飾部に前置詞句がある場合と形容詞相当語句がある場合の各々について示す。

1. 前置詞句が修飾部（関係節）にある場合

<table>
<thead>
<tr>
<th>イヘ</th>
<th>修飾部</th>
<th>被修飾辞</th>
<th>（枠構造）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>フェ</td>
<td>修飾</td>
<td>奉仕活動</td>
<td>イヘ &quot;神のために&quot;</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（イヘ「奉仕活動」：例20）

↓

<table>
<thead>
<tr>
<th>被修飾辞</th>
<th>イヘ</th>
<th>修飾部</th>
<th>（連辞省略）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>修飾</td>
<td>イヘ</td>
<td>修飾部</td>
<td>異常</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（例：イヘ「神のために奉仕活動」）

↓

<table>
<thead>
<tr>
<th>被修飾辞</th>
<th>イヘ</th>
<th>修飾部</th>
<th>（ゼロ）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>修飾</td>
<td>イヘ</td>
<td>修飾部</td>
<td>前置詞句</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（例えば、キリスト教の教義「スウェーデンの地の王」）

／ポスト・ノゲ・ミ／

-216-
② 形容詞相当語句が修飾部（関係節）にある場合

被修飾辞 - ИЖЕ - 修飾部（主格補語）
（格形式 i） （格形式は i にかかわらず主格）
（брата своего Пруса, ИЖЕ вышеромянутый：例 1 3）

被修飾辞 - ИЖЕ - 修飾部
（格形式 i） （格形式 i）
（младенца же нашего, еже от бога данного нам：例 1 4）

被修飾辞 - （ИЖЕ→ゼロ） - 修飾部
（格形式 i） （格形式 i）
（例えば、красная девица, живущая с нею в полать「彼女と共に
宮殿に住んでいる美しい乙女達」／К.И., гл.38／）

余剰的な ИЖЕ が現れ、消失していく一方で、余剰的であるが故に先行詞との
一致を欠く場合が増え、ИЖЕ は、Кершнене (1979) が指摘するような修飾部と
被修飾部をつなぐ補助的な単語と見なされる傾向にあったと考えられる。そ
して、そういった状況が、一致を守る ИЖЕ にも機能上の曖昧さを与えてしま
っている。更に、§3.3.1. にあげた接続詞的用法の ИЖЕ が、その文脈による
意味を多岐にわたらせていることもこれを助長している。これらにより、16
世紀のロシア語において既に文体的特徴を付加されていると考えられる（§4.
1.参照） ИЖЕ は、ますますその傾向を強めていったのであろう。231

4.2.2. КОТОРЫЙの変容

16世紀のロシア語で КОТОРЫЙの諸用法のうち使用頻度が高いのは、§3.3.2.
の i) であげた否定代名詞としての機能である。これは、ИЖЕの機能の一部（
無先行詞の関係節を導く機能）と意味の上では同じ機能を果たす場合もある
こと（例 1 6 参照）は、既に述べた。ところで、現代ロシア語においてはこ
の用法の КОТОРЫЙはみられない。それでは、古代ロシア語における否定代名
詞の機能（以下、特に断わらない限り否定代名詞の КОТОРЫЙとは、§3.3.2.
の i）の КОТОРЫЙを指すこととする。）は、現代ロシア語では何によって担わ
れているのか、という疑問が生じてくる。又、ИЖЕ が消失して行くにつれて、
ИЖЕ の果たしていた関係詞としての機能が КОТОРЫЙによってかなりの部分が代
替されるとすれば、そのことは КОТОРЫイのこの変容になんらかの関わりがあ
るのではないか。

16世紀のロシア語においては、コトーリは不定代名詞と関係代名詞としての二つの用法を併存させていたが、現代ロシア語では、関係代名詞としての用法でしか現れない。† これを図示する。

--- 古代ロシア語 ---

コトーリ - 被同定辞，イ - TOT - 被同定辞
（例15）

1) コトーリ - 被同定辞，イ - （指示）代名詞
（例16）

11) - 先行詞，コトーリ •
（関係詞コトーリ）

--- 現代ロシア語 ---

- 先行詞，コトーリ •
（関係詞コトーリ：例21, 22, 23）

現代ロシア語のコトーリの例をあげる。

例21. Цветухин шел в том состоянии, которое можно назвать

「その」 '状態' 'コトーリ'
m.sg.P. n.sg.P. n.sg.A.

 бездымом。 /Грам., '80, § 2905/

「ツベトゥヒンは、無発煙といつてよい状態になった。」

例22. Нинче те, которые больше всех и в самом деле скучают,

「彼らの人々」 'コトーリ'
m.pl.N. m.pl.N.

 стараются скрыто это несчастье как порок。 /Грам., '80, § 2925/

「今や、誰よりも實際退屈している人々がこの不幸を罪悪のように隠そうとしている。」

例23. Человек, который знающий свое дело ... который и сам

「人間」 'コトーリ' 'コトーリ'
m.sg.N. m.sg.N. m.sg.N.

сыт и ломал сыта, завсегда покоян ... /Чех., Тоска/

「己のことをしっかりやっている人間は、・・・自分の腹もいっぱいで、馬
も満腹している（人間）なら、（その人間は）いつも何もいうことはない
さ・・・。」

上図の古代ロシア語の1）に対応すると考えられるのは、例22、例23の

-218-
ようにKOTORØYによって導かれる関係節が主節に埋め込まれた文である。

現代ロシア語からかののぼって、消失してしまった不定代名詞のKOTORØYの用法の代替形を考えるに際して注目すべき点は次の三点である。

①並列の接続詞及び被同定辞の同一の名詞や（指示）代名詞による繰り返しの消失。つまり、現代ロシア語においてKOTORØYは、従属複雑文を形成する接続詞的語句である。

②現代ロシア語において、KOTORØYによって導かれる文に条件・帰結のニュアンスがでることがあること。

③関係詞KOTORØYの先行詞となる名詞に指示詞TOTが付加すること。

①は、統語法上かなり大きな変化である。古代ロシア語において、不定代名詞のKOTORØYによって形成される半従属複雑文もいうべき文においては、KOTORØYは不定代名詞としての機能と関係代名詞としての機能を合わせ持っていたが、前者の機能が後者の用法によって担われるようになったと思われる。

16世紀の文献においては、関係詞としてのKOTORØYの用法が、民衆口俗語に基をおく文章語が優勢となってくるにつれて、定着しつつあった。それにより（先行詞、KOTORØY）の語結合（つながり）が一般的となった。そのことが、不定代名詞のKOTORØYが果たす機能が例22、例23にみるように形式にとってかわられるという状況を引き起こし、やがて不定代名詞としてのKOTORØYの用法が失われることになったと考えることは可能であろう。

②については、主節に埋め込まれたKOTORØYの導く節による文において、条件・帰結のニュアンスが出ることがある（例23参照）のは古代ロシア語の不定代名詞による並置の文の意味を継承していると考えたい。

③については、現代ロシア語においてKOTORØYによって導かれる従属節が修飾する先行詞に指示詞TOT「その」が付加している場合がよく見られることに注目したい（例21）。このTOTは、古代ロシア語の不定代名詞を含む文中に後置される文の中で、繰り返される被同定辞に付加していたTOT（例15）の名残りではないだろうか。現代ロシア語においては、TOTは、KOTORØYによって導かれる関係従属節と先行詞の結びつきを強める役割を果たすとしている。（TOT先行詞、KOTORØY）という環境にたつ先行詞となる名詞は比較的限定的度合が低い、即ち、「人」や「物」といった特定性が低いとも言うべき名詞が目立つ。例えば、TOT ЧЕЛОВЕК、KOTORØY「...する人は」と等。26）

このことは、不定代名詞KOTORØYが、本来、有している不定的な（即ち、特定性が低いという）性格を反映していると思われる。

以上、三点についての考察から古代ロシア語の不定代名詞のKOTORØYは、
その形成する文の意味機能の中和から関係代名詞の**KOTORØY**に統合されていったと考えられるよう。

16世紀のデータは、ここでみた不定代名詞の**KOTORØY**と関係詞の**KOTORØY**の統合については、手がかりを与えてくれるにすぎない。しかしながら、その手がかりをもとに、現代ロシア語の関係詞**KOTORØY**の振舞いをあわせて、本節で行った考察は、**KOTORØY**の変容をある程度説明するものとなったと思う。この変容は、ロシア語史上の関係詞**IJE**から**KOTORØY**への変遷を、関係詞**KOTORØY**のカバーする機能が増えたという点で促すものと考えられる。

5. おわりに

古代ロシア語における主要な関係詞**IJE**と**KOTORØY**は、ロシア語の歴史の上で、**IJE**から**KOTORØY**という変遷を経た。本稿ではその変遷における、**IJE**、**KOTORØY**両者の関係について、16世紀の文献を中心に調査及び考察を行った。まとめとして、今回の調査で明らかになった、**IJE**と**KOTORØY**の機能の対応を下表に示す。

### **IJE**と**KOTORØY**の対応

<table>
<thead>
<tr>
<th><strong>IJE</strong></th>
<th><strong>KOTORØY</strong></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>関係</td>
<td>関係</td>
</tr>
<tr>
<td>有先行詞</td>
<td>有先行詞</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>連辞省略 §3.3.1.-1 (v), (v)</td>
</tr>
<tr>
<td>無先行詞</td>
<td>不定代名詞 §3.3.2.-1</td>
</tr>
<tr>
<td>詞「枠構造」 §3.3.1.-11</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>接続詞的用法 §3.3.1.-1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>名辞化用法 §3.3.1.-11</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>代名詞＋強意の助辞<strong>IJE</strong></td>
<td>疑問代名詞 §3.3.2.-11</td>
</tr>
</tbody>
</table>

この対応状況を、**IJE**から**KOTORØY**への変遷の1ステージとすると、ここにおいて次の二点が大きく作用してくれる。

①文献の性格、即ち、そこで使われている文章語の種類。

②**IJE**及び**KOTORØY**各々の変容。

16世紀の文献においては、①も②も、**IJE**から**KOTORØY**という変遷を促す方向に作用している。16世紀のロシア語においては、二つの文章語併用状態からすでに民衆口語に基盤をおく文章語が優位となっていた。従ってその文章語に専ら現れる**KOTORØY**が**IJE**の関係詞としての領域を侵した。一方で、**IJE**

---220---
の有するその他の機能の多くは生起の必然性を失い、もしくは、民衆口語語
調の文章語におけるその対応形にとって代わられ、消失した。更に、古代ロ
シア語の文章語の統一の流れにおいて、関係詞として優勢となったKOTORЫが、
多用されていた不定代名詞としての用法を、関係代名詞としての用法に
統合する傾向にあった。そして、そのことによって、関係詞KOTORЫは、関
係詞を全面的に代替するものとなったと考えられる。関係代名詞
のニェは、17～18世紀において、又、わずかに19世紀の文学作品において、
16世紀にすでにその傾向が顕著にみられた古風・典雅・教会スラブ語風色彩
をつけるという特別な意図を持ってのみ使用されるきわめて特殊な語彙とな
った。現代ロシア語においては、ニェは、もはやそういった意図を持っても
使われない。

註
1）本稿でいう古代ロシア語とは、17世紀後半に国家統一語(националь-
ный язык)の成立以前（11－17世紀）にロシアで使われていた言語を指す。
2）従属複文（сложнополоченное предложение）を形成する関係代名
詞によって導かれる従属節を指す。Ср. Русская Грамматика, § 2755,
§ 2756。
3）例文の表記は各例文の典拠「略号については、§ 2.2.参照」としたテ
キストの表記にしたがった。尚、ロシア語文中、ニェ、КOTORЫの部分には、
________を、先行詞などには、________を、又、ニェ、もしくはКOTORЫに
よって導かれる節や句には、__________を、原則として付きした。必要に応じ
て、例文中の語句には逐語訳を付した。又、前置詞や動詞について、n
格としてあるのは、「n格を要求する」の意とする。訳文においては、
例文に、なるべく対応するよう同じく下線を付した。その他、略語につい
ては、本稿末の付表Bを参照。
4）これらのうち、КОНは、人・事物を先行詞として、18世紀より19世紀
にかけて広く使われた。16世紀の文献においても既に散見される。例えば、
Казанская История (История о Казанском Царстве)の、ПСРЛ19巻1にお
いては、本稿で扱ったテキスト写本において、КOTORЫが使われている箇
所にКОНを用いている箇所があり(p.118)、数量的には少ないが、КOTORЫ
の同義語といえる。КТО「誰」、ЧТО「何」は、13－14世紀から使われがみら
れる。数においては先行詞と一致しない。ЧТОは、活動体を先行詞とする
こともあった。КТОは、次第に関係節を導く接続詞的語としては使われな
くなり、ЧТОは、現代ロシア語では、主格及び対格の形式においてのみ使
われる。他に、

"どのように、" 順に「誰の」等が関係代名詞として
あった。いずれも、余り使用頻度は高くない。関係副詞としては、「で
ここに」、KUダ「どこへ」、OTKUDA「どこから」、NDE「どこで」、
KOGA「いつ」、Yoko「どの様に」、ELICO「いかほど」等がある。

5） Буслаев(1959), Кернштейн(1979), Корш(1877), Ломтев(1956), Сумкина
(1954)その他。但し、関係從属文としてのIJEによる文の成立過程につい
ては、見解の相違がある。

6） Сумкина(1954), pp.200-201参照。

7） Ickler(1981), § 3.522参照。

8） 古代教会スラヴ語のもっとも古い時代の諸文献には、疑問代名詞に起
源を持つとされる関係詞は、皆無といってよい(Bauep:1967, § 4.1)。尚、
IJEのИは、指示代名詞にさかのぼるとすれば、次のことが興味を引く。即
ち、古代教会スラヴ語においては、指示代名詞のパラダイムとIJEのИのパ
ラダイムは、単数主格形が、同じ形式をとっている。ところが、古代ロシ
ア語においては、これらの形は、n(m.sg.N.), я(f.sg.N.), е(n.sg.N.)の
かわりに、онъ, она, онаという形をとって現れるのが普通となってきた。
これは、и, я, е の形式が、パラダイムの中に同形のものをいくつか持っ
ていたり、他にも同音異義語、例えば、и は、並列の接続詞「そして」と
同じ形になるので起こったと考えられている。古代ロシア語でこの交替が
起こっていた頃には、IJEは、既に、関係詞として成立していたのである。
というのも、онъже、онаже、онаже という形は、皆無ではないが、普及は
せず、и, я, еとIJEにおいて、依然としてи-, я-, е- が保存されていた
からである。

又、スラヴ諸語の中において、ロシア語とは違い、現代チェコ語は、
「どちらの」という疑問代名詞と同じ形式のkterýともに、IJEと同源と
考えられるjenžが、関係代名詞として使われている。(Bаuеร:1967)

9） 「オストロミールの福音書 Остромирово Евангелие」とは、補祭グリ
ゴーリーが、1056年から1057年にブルガリア語のオリジナルからノブゴロ
ドの長であったオストロミールのために、書き写した福音書である。この
福音書には、多くの東スラヴ語の特徴が現れており（特に多くの無意識の
書き写しの誤りは、東スラヴの音韻の特徴をあらわしている）、それまで
の南スラヴの言語特徴を表している文献（古代教会スラヴ語による福音書
など）と区分して、この福音書は、古代ロシア語の最古の文献として一般
に考えられている。

10）12世紀に成立したとされる Повесть временных лет「過ぎし年月の
物語」の中で関係詞としてのKOTORYIの使用がみられる。（ロメイ・1956，p.561参照）。又、クレシュネ（1979：p.76）によると、モレレーション・ダニエラ・ザトチニコの祈り、クロス・がオルコ・イ・G・キリ・軍記、N・ロシ・ア・法典には、ごく稀に接続詞の語句（関係詞）としての使用がみられる（1-2例ずつ）とされている。古代ロシアの文書がートにおいては（13世紀以降）多用されている。

11）参考文献Ⅱ参照。
12）明らかに代名詞+強意の助辞Eとわかるものについては除外した。
13）他に、KAK「-のように」やKOGDA「-の時」の意等になることもある。
14）対応する例と考えられるものをあげる。

a で と も お こ な い す こ し ソ レ ン で の 地 の 王 と な っ た と 、自 分 で 書 て て お こ な っ た で は な か か ？

15）不定詞が、単独で、名詞として機能することは、一般的である。
16）この例では、ежеを「もし・・・ならば」という条件を表す接続詞と考えることも可能である。訳文としては、「もし・・・であると思うとしたら、これは---に反しているか。」。しかしながら、本稿では、注14にあげたような例の借用として考える。
17）テキストでは、Погубитьに続いて、「(и как бы им не погубить!)」

(そして、どうしてあいつらに亡きものにすることなどできようか！）」

がある。
18）ちなみに文献3 クルブスキーへの手紙の中では、先行詞 ЕЖЕ-（主格）補語の組合せは、м.А.-е же-А.、п.Д.-е же-D.、м.Г.-е же-G.、м.А.-е же-А.、м.Г.-е же-G.
19）KOTORYIには、§3.3.2の1）の用法の不定名詞の他に、条件・帰結の意を持たない不定名詞がある。

例、и вьется тот холоп не которые земли опять к Москве、и

f.sg.G.「地」

он старому государю холоп по старому холопству、/Суд.、ст.80/

「、そして、その奴隷が、墓の地から再びモスクワへ戻って来ると、かつての雇用関係のもとに、かつての主人の奴隷となる、」

20）ちなみに、1550年の法典では、KOTORYIが形容詞的になんらかの名

-223-
Судя по всему, в этом документе есть ошибки и непонятные символы. Попробуйте определить контекст и попытаться понять смысл текста, расшифровать символы или сообщите о проблеме.
「誰よりも、私がために淫らな行いをおさえられていた僧や尼達が、わ
めきました。」

25）現代ロシア語には、§3.3.2.1の不定代名詞としての用法は無い
が、不定代名詞に次のような用法がある。

何時も私は、尋ねている。」

ある子供等は、家の中に居り、ある子供等は、馬に乗っていた。」

26）ここで言う「特定性が低い」というのは、固有名詞を最も特定性が
高いとした場合、その反対に位置すると考えられる語彙を指す。例えば、
発話において、修飾語をもってなって生起する場合が多い語彙のことを指す。

付表A 略語

A.=対格 PPP.=分詞被動過去  l.='葉'
aor.=アオリスト prn.=代名詞 l.ob.='裏面'
D.=与格 prp.=前置詞 Ост. Мар.=Oстомиро
f.=（文法）女性 sg.=単数形 евангелие
G.=生格 1,2,3=各々、（参考文献II参照）
I.=造格 1,2,3人称を表す「マルコによる福音」
m.=（文法）男性 Биб.='聖書'
(参考文献II参照) сt.='条'
N.=主格 t.=「巻」
n.=（文法）中性 гл.='章'
(参考文献II参照) Чех.=Рассказы(1978)
P.=前置格 Грам. `80= ロシア
pf.p.=完了分詞 'Грамматика'
pl.=複数形 (参考文献I参照)

付表B 対象とした文献の数

①約55字×約758行  ②約55字×約5238行  ③約65字×約990行
④1)約55字×約142行  1)1)約55字×約384行  111)約55字×約566行
ⅲ)約55字×約41行  ⅲ)約55字×約258行  ⅲ)1)約55字×約73行
ⅴ)約55字×約860行  ⅴ)前半の章及び64章 約55字×約941行
ⅵ)後半の章 約55字×約1158行  ⅵ)約60字×約1047行

-225-
表2  ИКЕの分布

<table>
<thead>
<tr>
<th>文献</th>
<th>①</th>
<th>②</th>
<th>③</th>
<th>④</th>
<th>i)</th>
<th>ii)</th>
<th>iii)</th>
<th>iv)</th>
<th>v)</th>
<th>vi)</th>
<th>vii)</th>
<th>前後</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>関係詞（有先行制）</td>
<td>76</td>
<td>143</td>
<td>55</td>
<td>45</td>
<td>19</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>23</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>6</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞に数・数が一致</td>
<td>73</td>
<td>129</td>
<td>35</td>
<td>38</td>
<td>14</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>21</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>連辞省略</td>
<td>23</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞に数・数が不一致</td>
<td>3</td>
<td>14</td>
<td>20</td>
<td>7</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>連辞省略</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>関係詞（無先行制）</td>
<td>13</td>
<td>17</td>
<td>9</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞rel.主格補語</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>格が一致</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>「束構造」</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>接続関的</td>
<td>3</td>
<td>19</td>
<td>35</td>
<td>6</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>7</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>名辞化</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>こそな...</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>41</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>その他の</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>110</td>
<td>187</td>
<td>168</td>
<td>62</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>25</td>
<td>0</td>
<td>32</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>20</td>
<td>20</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：文献の番号は、§2.2.参照。
尚、⑥の前は、前半25章までと第64章を含む。
各文献の分量については、付表B参照。

表3  КОТОРЫИの分布

<table>
<thead>
<tr>
<th>文献</th>
<th>①</th>
<th>②</th>
<th>③</th>
<th>④</th>
<th>i)</th>
<th>ii)</th>
<th>iii)</th>
<th>iv)</th>
<th>v)</th>
<th>vi)</th>
<th>vii)</th>
<th>前後</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>関係詞</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>35</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>15</td>
<td>8</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞にTOTが付加している</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞にTOTが付加していない</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>21</td>
<td>4</td>
<td>7</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>8</td>
<td>8</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>先行詞がけり返されている</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>不定代名詞</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>22</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>11</td>
<td>38</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>名詞に付加している不定代名詞</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>8</td>
<td>32</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>名詞に付加していない不定代名詞</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>7</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>4</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td>-</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>疑問代名詞</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>28</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>18</td>
<td>8</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>不定代名詞*</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>その他の</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>0</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>80</td>
<td>9</td>
<td>20</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>48</td>
<td>52</td>
</tr>
</tbody>
</table>

＊については、本文注18参照
参考文献

I.

Бауэр, Я. (1967) "К развитию относительных прилаточных предложений в славянских языках," Вопросы языкознания No.5, 47-59.

Борковский, В.И. (ред.) (1979) Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Сложное предложение. Москва: Наука.

Борковский, В.И. & П.С. Куценков (1963) Историческая грамматика русского языка. Москва: Наука.

Буслаев, Ф.И. (1959) Историческая грамматика русского языка. Москва: Просвещение.


Виноградов, В.В. (1940) "Основные этапы истории русского языка." Русский язык в школе No.3, No.4, No.5.

Винокур, Г.О. (1945) Русский язык: Исторический очерк. Москва.


Императорская Академия Наукъ (1867) Словарь церковнославянского и русского языка. Санктпетербург.

Качевская, Г.А. (1954) "К истории сложноподчиненных предложений с прилаточным определительным." Труды института языкознания АН СССР, т.5., 203-223.


Корш, Ф. (1877) "Способы относительного подчинения. Глава из сравнительного синтаксиса." Москва. (reprinted) (1965) Хрестоматия по истории грамматических учений в России (Щеulin, В.В. & В.И. Мелведева, сост.), 245-251.

Кручинина, И.Н. (1968) "Конструкция с местоимением который в современном русском языке," Вопросы языкознания No.2, 82-88.


-227-


Ломтев, Т.П. (1956) Очерки по историческому синтаксису русского языка. Москва: Изд. Московского Университета.

Лурье, Я.С. (1979) "Переписка Ивана Грозного с Курским в общественной мысли древней Руси," в кн. Переписка Ивана Грозного с Андреем Курским (参考文献Ⅱ参照), 214-249.


松井茂雄 (1966) 「司祭長アヴァクム自伝」 (訳)『スラヴ研究』10号, 85-144.


Ожегов, С.И. (198820) Словарь русского языка. Москва: Русский язык.

Потебня, А.А. (1968) Из записок по русскому грамматику. т.Ⅲ. Москва: Просвещение.

Срезневский, И.И. (1893-1903) Материалы для словаря древнерусского языка. Санктпетербург: Императорская Академия Наук.

Стеценко, А.Н. (19772) Исторический синтаксис русского языка. Москва: Высшая школа.

(1982) "О лексике древнерусского языка," Вопросы языкознания
No.2., No.3.
Шведова, Н.Ю. (ред.) (1980) Русская грамматика. т.П. АН СССР.
Москва:Наука.

II.
Библия. Книги священного писания ветхого и нового завета (1976)
Издание московской патриархии. Москва.
Домострой по списку Императорского общества истории и древностей российских (1882) Москва. /Rarity Reprint nr.18. (1971)
Hertfordshire:Bradda Books Ltd.
Жизнеописания Аввакума и Эпифания (1963) Робинсон, А.Н., (сост.).
Москва:АН СССР
История о Казанском Царстве (1903) Полное Собрание РусскихЪ
Памятники литературы Древней Руси, Начало русской литературы Х-
начало XII- века. (1978) Дмитриев, Л.А. & Л.С. Лихачев, (сост.)
Москва:Художественная литература.
____, Вторая половина XVI века. (1986) Там же.
Памятники русского народно-разговорного языка XVII столетия (1965)
Котков, С.И. & Н.И. Тарабасова, (полгот.). Москва:Наука.
Памятники русского права, вып.4. (1956) Черепнина, Л.В., (ред.)
Москва:Государственное издательство юридической литературы.
____, вып.5. (1959) Там же.
____, вып.6. (1957) Там же.
Памятники русской письменности XY-XU веков. Рязанский край (1978)
Котоков, С.И., (ред.). Ленинград:Наука.
Памятники южнобелорусского наречия. Отказные книги. (1977) Котков.
С.И. & Н.С. Коткова, (ред.) Москва:Наука.
Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским (1979) Лурье, Я.С. &
Ю.Д. Рыков, (подгот.). Ленинград:Наука.
Послання Ивана Грозного (1951) Лихачев, Д.С. & Я.С. Лурье, (подгот.).
Москва-Ленинград:АН СССР. /Slavica reprint. nr.41.(1970) Vaduz
Liechtenstein:Europe Printing Establishment.
Русская демократическая сатира XY век (19772) Адрианова-Перетц,
В.П. (ред.) Москва.
Русские повести XY-XU веков (1958) Скрипиль, М.О., (сост.). Москва:
Гослитздат.
Судебники XY-XU веков (1952) Мюллер, Р.Б. & Л.В. Черепнина,
(подгот.). Москва-Ленинград:АН СССР.

(ふじしろ せつ、博士後期課程)

-230-